The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	メディアに見るシンガーミシン裁縫女学院の沿革とミシン裁縫教育
Author(s)	池田, 仁美
Citation	デザイン理論. 2015, 66, p. 3-16
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/56263
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

メディアに見るシンガーミシン裁縫女学院の沿革とミシン裁縫教育

池　田　仁　美

キーワード
シンガーミシン裁縫女学院，洋裁，ミシン，明治，大正
Singer Sewing Machine Women's Academy, dressmaking, Sewing Machine

１．はじめに
２．資料概要と調査方法
３．裁縫女学院の設立から衰退まで
４．裁縫女学院における指導内容
５．裁縫女学院の正規課程外でのミシン裁縫指導
６．『婦人画報』の広告に見るシンガーミシンに対する意識
７．おわりに

１．はじめに

米国シンガーミシン社は，1900（明治33）年，日本に進出した。同社は，日本におけるミシンの販路拡張には家庭におけるミシン裁縫の普及が先決であり，ミシン裁縫の教育機関を設けて洋服に関する知識の教授及び裁縫技術の指導をする必要があると考えた。同社は，シンガーミシン裁縫女学院（以下裁縫女学院と称す）を有楽町に設立し，1906（明治39）年にシンガーミシン会社極東支配人の秦敏之による私立学校設立願[1]が東京府に受理された。校長は妻の秦利舞子である。生徒の通学動機には，婦人のたしなみ，家計の補助のためや，職業訓練として学ぶ未亡人[2]などが挙げられる。裁縫女学院の開校式には，中流以上の夫人や令嬢が見られ，中には上流婦人もいたとある[3]。生徒は，経済状況や修業目的は異なるが，手縫いから機械裁縫への変化を受容しようとする，先駆的な女性達であったといえよう。

裁縫女学院における指導には，衣服雛形及び被り物雛形の作成が含まれることが，先行研究において明らかになっている[4]。さらに最初期の裁縫女学院に学んだ人物[5]の遺品[6]には，当時の授業で用いた「裁縫ノート」があり，同人の在籍期間中の教育内容については別に分析及び把握しつつある[7]。裁縫女学院の活動概要は，公文書資料から推察できる部分もあるが，学校史の編纂もされておらず，全体像は不明である。秦敏之は，ミシン裁縫を一般家庭に浸透させるため，「大々的な新聞広告法」[8]を採用しており，メディアを意識した販売活動をおこなって

本稿は第55回大会（2013年７月21日，於：福井工業大学）での発表に基づく。

いた。本論では，一般人の目に触れることができ，時代に即した情報を発信した新聞及び雑誌の記事と広告から，裁縫女学院の設立から衰退に至る迄の経緯を再構築することを試みる。同時に，そこで行われた指導内容の変遷から，ミシンを用いた裁縫教育の基盤になった指導内容について考察する。特に，裁縫女学院の卒業生は全国のミシン販売店で指導にあたっており，裁縫女学院は，日本におけるミシン裁縫と洋裁の普及に大きく貢献したと考えられる。また，その指導内容は，現在の洋裁指導の手順や教材選択の方法の源流となっていると推測される。

なお，シンガーミシン社は東京に次いで，大阪，横浜などの各市にシンガーミシン裁縫女学院を設立していたことがわかっているが，本論は東京のシンガーミシン裁縫女学院に関する情報を参照している。また，調査の結果，裁縫女学院には名称の変遷があったことがわかっているが，それらは同住所にあったため，本文中では特記する場合を除いて，シンガーによるミシン裁縫学校を総称して「裁縫女学院」と記す。

２．資料概要と調査方法

２－１．資料概要

当時のメディアから，一般紙である『読売新聞』（以下『読売』とする），『朝日新聞』（以下『朝日』とする）及び，女性の読者層に向けた『婦女新聞』，雑誌資料として『婦人画報』を取り上げ[9]，これらの資料に掲載された，裁縫女学院やミシン裁縫に関連するすべての記事及び広告から得られた知見に基づいて裁縫女学院の実態を再構成する。

『婦女新聞』は，教育，職業，政治経済において女子の能力の機会均等を主張した福島四郎によって1900（明治33）年に創刊され，1942（昭和17）年まで約42年間刊行された週刊新聞である。その発刊目的は，女子教育方針の確立，善良な家庭の創造，家事経済の知識の普及，婦人団体の交流・発展であったことが創刊号から読み取れる。記事内容は，政治経済や衣食住，教育に関するものなどがあり，教育については，毎号の「婦人界女子教育界雑報」欄に時事記事が掲載された。記事内容から，女学生，教師，文検の受験生，師範学校生など，上層階級でなおかつ積極的に職業に就こうとした女性が読者層であると想定される[10]。

『婦人画報』は，1905（明治38）年に創刊された女性向けグラフ誌で，令嬢の写真を多く掲載するなど，上流婦人を意識した紙面構成で，裁縫女学院の生徒も読者であったと想定できる。同院の設立期から衰退期まで継続して刊行しており，新聞メディアと合わせて調査対象とする。

２－２．調査方法

前述の資料からシンガーミシン及び裁縫女学院に関連した記事・広告を抽出し，調査対象と

する。『読売』と『朝日』はデータベースを使用した。1868（明治元）年から1945（昭和20）年の期間中において，“シンガー”及び“ミシン”の検索キーワードに該当する記事・広告は，『読売』115件『朝日』167件で，そのうち調査対象となるものは『読売』89件，『朝日』98件であった[11]。『婦女新聞』は1904（明治37）年１月１日第191号から1927（昭和２）年12月25日第1437号[12]をすべて閲覧し，139件の裁縫女学院に関する記事・広告を確認した[13]。『婦人画報』は明治38年７月から昭和19年４月の間に発行された全482号の画像データベースシステム[14]を用いた。“シンガー”及び“ミシン”の検索キーワードの該当記事数は51件で，このうち調査対象となるものは28件であった。これらの記事からは，裁縫女学院の沿革と制度の展開を推察でき，また，広告からは，シンガーミシンの販売促進活動や，裁縫女学院の生徒募集の動向を読み取ることが可能である。

２－３．広告の分類と各紙の掲載状況

各紙に掲載された広告は，掲載した回数や時期，体裁が異なっており，読者層の違いに対応した広報活動が展開されていたことが示唆される。広告記事は，①シンガーミシン会社によるミシンの販売広告，②①に裁縫女学院の紹介を追記した広告，③裁縫女学院による生徒募集広告の３種に分類することができた。各紙に掲載された広告の分類と掲載数の推移について表１

表１　読売新聞・朝日新聞・婦女新聞・婦人画報に掲載された，シンガーミシンに関する広告数

	ミシン販売広告				ミシン販売広告に学校紹介文				裁縫女学院による生徒募集広告			
	読売	朝日	婦女	婦人画報	読売	朝日	婦女	婦人画報	読売	朝日	婦女	婦人画報
明治37											5	
明治38											3	
明治39		3					10			1	2	
明治40		9	4			1	12			1	1	
明治41		8	10			1			1	1	2	
明治42			5							1		
明治43				1								
明治44		1		11								
明治45		2		6				1				
大正2		4						4				
大正3												
大正4												
大正5									5		3	
大正6									9		17	
大正7									2	1	12	
大正8									8	3	10	
大正9									6	7	5	
大正10									6	7	1	
大正11									5	6	5	
大正12									2	2		
大正13												
大正14										3		
大正15												
合計	0	27	19	18	0	2	22	5	44	33	66	0

に示す。『婦女新聞』には，他紙よりも高い頻度で生徒募集広告が掲載されており，先駆的で学びへの関心が高く，自活を意識した読者層の需要を想定していたことが示唆される。一方，上流婦人を読者対象とした『婦人画報』の広告は，ミシンの販売広告が中心で，ミシンを家に所有させることを優先したと言える。『婦人画報』のミシン販売広告は，誌面全面を用いてミシンの購入を喚起する語り口調の広告文や，ミシン裁縫をしている様子の挿絵が含まれており，小型の広告枠の他紙とは異なる特徴を持つ。『婦人画報』の広告文の分析結果は後述する。

３．裁縫女学院の設立から衰退まで

３－１．名称と所在地の変遷

新聞紙上において裁縫女学院の存在が最初に確認できるのは，1904年の『読売』（明治37.7.2）である。私立学校設立願が受理された1906（明治39）年の２年前のことで，「ミシン裁縫女学院　アメリカのシンガー製造会社で東京・神田に設立　米国シンガー製造会社の発起に係る同女学院は今回神田区表神保町一番地に設立したるが，修業期間は本科午前八時より六時間三ヶ月，別科午後二時より二時間にて授業料本科一ヶ月一円，別科五十銭，簡易科一円，束修各科五十銭」とある。

同様の内容の記事は，『朝日』（明治37.7.4），『婦女新聞』（明治37.7.11）に掲載され，『朝日』には「シンガーミシン機械を以てシャツ，股引，単衣其他各種衣服の裁縫方を教授するものにて院長は秦利舞子なりと」という一文もある。本科・別科・簡易科に分かれ，組織的にミシン裁縫指導がおこなわれていたことが見てとれる。この“ミシン裁縫女学院”は，神田幼稚園内に設置され，20数名の生徒で開校された[15]。日露戦争の開戦と重なり，出征人の夫人や，職人，貴婦人，令嬢も参加してシャツやズボン下などの裁縫を行い，得た賃金を恤兵部に寄付した[16]。

この最初期の学校は，生徒の増加に対応するため，翌1905（明治38）年に麹町区有楽町三丁目一番地に移り[17]，1906（明治39）年８月には麹町区有楽町一丁目五番地に新築された校舎において夏期講習が開催された[18]。同年10月21日，“シンガーミシン裁縫女学院”として開校式が行われ，以降，継続してこの地にあった。“シンガーミシン裁縫女学院”は1910（明治43）年12月に閉院するが，その後，1912（大正元）年から1913（大正２）年の『婦人画報』の広告では“シンガー裁縫刺繍院”の名に代わり，次いで，1916（大正５）年から1925（大正14）年の間は，“シンガー裁縫院”の名称で掲載された。

表２　裁縫女学院の住所と名称の変遷

	住所	名称
明治37年～	表神保町	ミシン裁縫女学院
明治39～43年	有楽町	シンガーミシン裁縫女学院
大正元年～	有楽町	シンガー裁縫刺繍院
大正5年～	有楽町	シンガー裁縫院

３－２．“シンガーミシン裁縫女学院”

1907（明治40）年３月，“シンガーミシン裁縫女学院”には定員250名のところに269名が在籍していた[19]。教員は矢野元子他７名で，ミシンは１台を４人で使用する学習環境である。校舎の増築に伴い，同年９月２日の学校案内による定員は1000名となった[20]。設備の増強も行われ，生徒約20人に対して13，４台のミシンが配備され，教員数は17名となった[21]。

“シンガーミシン裁縫女学院”閉院は，1910（明治43）年９月９日の『朝日』及び同月12日の『婦女新聞』に告知された[22]。また，『婦女新聞』は閉院に関する独自の見解記事を掲載した[23]。両記事の内容を整理すると，シンガーミシン会社と秦敏之との間に，裁縫女学院の設立の目的と教育に対する理念の違いがあったことが示唆される。

秦は，閉院の理由として，隆盛期には500余名いた生徒が1910（明治43）年の時点で200余名程度に減少したこと，シンガーミシン裁縫女学院以外にも全国の高等女学校や裁縫女学校等で機械裁縫教育が行える設備が整ってきたことを挙げ，これらの原因は，機械裁縫教育の普及によるものであると判断した。よって，学校設立の目的を達成したために，これ以上存続する必要がないと考えた。一方，シンガーミシン会社は，閉院後の校舎をシンガーミシン会社の女教師養成の場所とし，さらに卒業生を全国に派遣して同様の学校を設立しようとした。両者の矛盾について秦利舞子は，『読売』[24] において，「学校がどんどん発展するにつれて夫の関係していたシンガーミシン会社が私どもの学校を利用して営利を得ようとしましたのでずいぶん困ったものです。初めから営利を目的として立てた学校ならですが，私どもは全く営利をはなれて社会の文化への貢献の心だったのですから其点でいつも会社と私どもとは反目していました。大正四年に夫はミシン会社と縁を切ると共に神田にミシン裁縫に就いて必要な一切の機械材料を販売する秦商店を開いて来ました」と述べている。このことからも両者の間には軋轢があったことが窺え，その結果閉院に至ったと言える。

閉院広告を最後に，新聞中に“シンガーミシン裁縫女学院”の名称での広告と記事は姿を消し，“シンガーミシン裁縫刺繍院”が掲載されるようになった。1912（大正元）年12月４日の『中央新聞』には，「シンガー裁縫機械会社が主として経営している麹町区有楽町一の五シンガー裁縫刺繍院では現に生徒を養成してる（原文ママ）」とあり，経営の中心はシンガーミシン会社に移ったことが窺える。改称の事実は，裁縫女学院で主任教師を務めた矢野元子が1915（大正４）年『新真婦人』で明記しており[25]，“シンガー裁縫刺繍院”が正式名称として用いられていた期間があったことが示唆される。

秦利舞子は，閉院と共にミシン裁縫の指導から離れ，秦商会の経営を担当したが，後の1924（大正13）年に中渋谷の海江田山に東京技芸女学校を設立し，ミシン裁縫の指導をした[26]。

３－３．“シンガー裁縫院”

1916（大正５）年以降，“シンガー裁縫院”の主事は宗田覚が務めた。宗田覚は『裁縫ミシン使用法全書：附・誰でも出来る小児洋服の裁方と縫方』を著しており，自身もミシンの指導に関して明るい人物であった[27]。“シンガー裁縫院”は1921（大正10）年には生徒500～600名を収容していたが，ミシン刺繍を主に指導し，洋服を縫うことはほとんど行われていなかった[28]。同年８月，同院の生徒募集広告から「刺繍」の文字が消え，「新しい時代に適応した婦人服，子供服の専修科を設けました」という広告がこれ以降掲載されるようになる。専修科は，後の文化服装学院の創始者である並木伊三郎がシンガー裁縫院内に設けた洋服科である[29]。1922（大正11）年６月，並木伊三郎はシンガー裁縫院から独立し，文化裁縫学院を設立するが，その後も“シンガー裁縫院”では，婦人服，子供服の専修科の生徒募集広告を1923（大正12）年まで継続して掲載した。1923（大正12）年の関東大震災で校舎を焼失したものの，震災以前には約500人だった生徒数は，震災以降に増加し1924（大正13）年３月には定員を超える入学希望者があった。1925（大正14）年には銀座三丁目三番地に第二校舎を設け，新たに普通科約100名の生徒募集をおこなった[30]。“シンガー裁縫院”の記事・広告は，1927（昭和２）年１月31日の『読売』の学校紹介記事以降はない。但し，昭和８年３月31日に在校生の不在による経営難を理由に，シンガー裁縫院廃校願が東京府に提出されたことがわかっている[31]。

４．裁縫女学院における指導内容

４－１．指導科目の変遷

開校当時の各科における指導内容は，開校式の秦敏之の演説によると，「本院は普通科三ヶ月高等科三ヶ月他に研究科三ヶ月に分ち普通科はホワイトシャツ靴下ヅボン下日常の必需品を調整し得る技能を授け，高等科に至れば背広位縫ひ得る技能を授け，研究科に入れば最早黒人を凌ぐべき技倆充分に備はる」[32] もので，裁縫女学院では，機械の操作方法のみならず，ミシン裁縫を通じて洋服について理解させ，製作方法を指導していたことがわかる。裁縫女学院による生徒募集広告や，学校紹介記事に掲載されていた指導科目，修業期間，授業料を拾い上げ，把握できた指導科目群を次の表３に整理した。

“シンガーミシン裁縫女学院”に設置された科目は，ミシン裁縫の「普通科」，「高等科」，「研究科」と「ミシン刺繍科」，「子供服・婦人服専修科」，女学校の技芸的な要素のある「家政・技芸系」に分類することができる。「普通科」「高等科」「研究科」は普通科から継続して受講し，各３ヶ月～６ヶ月の修業で，月謝は１円～１円50銭であった。「家政・技芸系」では，1907（明治40）年には，随意科で毎日一時間ずつ修身，国語，数学，家事の諸学の指導，別

表３　裁縫女学院における指導科目の変遷

学校名		ミシン裁縫			ミシン刺繍科	家政・技芸系	婦人服専修科	その他
		普通科	高等科	研究科				
ミシン裁縫女学院	1904（明治37）							本科 3ヶ月（1円/月） 別科 （0.5円/月） 簡易科 3ヶ月（1円/月）
シンガーミシン裁縫女学院	1906（明治39）	○ 3ヶ月 （1円/月）	○ 3ヶ月 （1.5円/月）	○				
	1907（明治40） 3月	○ 3ヶ月 （1円/月）	○ 3ヶ月 （1.5円/月）	○ 6か月 （1.5円/月）		別科（編物・造花） （0.5円/月）		随意科
	1907（明治40） 9月	○	○	○		家政科（国語、数学など） 随意科（造花、編物、ミシン刺繍）		
	1908（明治41） 10月	○ 3ヶ月 （1.5円/月）	○ 6ヶ月 （1.5円/月）	○ 年限なし （1.5円/月）	○ 6ヶ月 （1円/月）	家政部 2年（2円/月） 随意科（編物・造花） 6ヶ月（0.75/月） 別科（教育科） （1円/月）		ミシン裁縫中等科 6ヶ月（1.5円/月）
	1909（明治43） 3月	○	○	○	○	家政部 和服部 造花部 生花部		
シンガーミシン裁縫院	1912（大正元） 12月	○ 3ヶ月	○ 3ヶ月	○ 随意	○ 3ヶ月			
シンガー裁縫院	1916（大正5） 3月	○ 3ヶ月	○ 3ヶ月		○ 3ヶ月			
	1921（大正10） 6月							随意科
	1921（大正10） 8月						○	
	1925（大正14） 9月	○						
	1927（昭和2） 1月	○ 9ヶ月 （3円/月）	○ 9ヶ月 （3円/月）	○ 年限なし （3円/月）	○ 9ヶ月 （3円/月）			随意科 年限なし（3円/月）

科では編物，造花の指導がされていた。別科はミシン裁縫科に通う生徒の経済支援の意味合いもあり，授業料は普通科の半額の50銭であった。1908（明治41）年には，家政部が設けられ，主任教師の高木たね子による修身，衣食住，家計簿記，育児法，看護法，実用の国語及び書簡文，英語，和洋裁縫，作法の授業が開講された。

1910（明治43）年の“シンガーミシン裁縫女学院”の閉院後は，「家政・技芸系」の科目は，開講されておらず，シンガーミシン会社の販売促進に直接携わる女教師を養成する場として，ミシン裁縫およびミシン刺繍に特化した指導をした。但し，広く生徒募集広告を掲載していたことから，社内に限定した組織ではなかったと思われる。1927（昭和２）年には，各科の修業期間を９ヶ月とした教程になり，指導内容の改変があった。

４－２．ミシン裁縫指導に用いられた教材

ミシン裁縫各科で用いられた教材については，具体的な内容を記載した記事は多くないが，1907（明治40）年３月21日及び1927（昭和２）年１月31日の『読売』で確認できる。それぞれを明治期（“シンガーミシン裁縫女学院”の期間），昭和期（“シンガー裁縫院”の期間）の指導内容とし，表４に整理した。各服種名は掲載順の通りである。

明治期の普通科では，基礎的なミシンの使用法と男子シャツ，男女児服と涎掛けの他，製図の指導が行われていた。婦人服は含まれず，日常生活に必要な衣服が目立つ。高等科では外衣である一重胸外套や，婦人服の女子シャートウエストが含まれる。シャートウエストは，シャツウエストであり，単仕立てのブラウス様の女性用上半身衣である。研究科では簡単服や帽子や胸掛といった小物類から，フロックコートや燕尾服など，仕立屋に出すような服種に至るまで，多種多様な服種が教材として用いられた。普通科と高等科において，海軍帽や医師手術衣といった戦時下に必要な服種や，礼服が含まれることから，家庭での着用のみならず，ミシン裁縫を職業として活用することを前提とした指導内容であったことが窺える。

昭和期は，明治期で指導されていたような礼服や背広は含まれない。普通科では，シャツ，割烹着，エプロン及び子供の通学に必要な服種がある。高等科では，男女児の服，帽子，外套と学生服に加え，婦人服，ネグリゼーンシャツの指導が行われた。

表４　ミシン裁縫指導に用いられた教材『読売』（明治40.3.30）（昭和2.1.31）より作成

明治40年3月21日

普通科	高等科	研究科
ミシン使用法	男児洋服	特殊の女児胸掛
穴かがり、マツリ縫い	一重胸外套	簡単服
シャツ	医師手術衣	帽子
涎掛け	学生帽襪衣	背廣
女児洋服	女子シャートウエスト	フロックコート
下着	（スカート等裁ち方は製図式による）	燕尾服等男子の礼服
帽子		通常服の裁縫
男児水兵服		洋服着用上の注意作法等
夏冬の製図裁縫		
海軍帽等の裁方と縫方		

昭和2年1月31日

普通科	高等科
ミシン及び付属品使用法	男女児服
千鳥縫	男女児帽子
マツリ縫、穴かがり	婦人服
シャツ数種	ケープ学生服
ズボン	女児外套
ブルマース	学生外套
スポートシャツ	ネグリゼーンシャツ等
割烹着	
エプロン	
男女帽子	
男女服コンビネーション	
スクールコート等の縫方	

明治期と昭和期を比較すると，昭和期には礼服や背広，軍事関連品の指導は行われず，家庭で家族が着用する衣服に限られた内容になっていることに注目できる。昭和期は，関東大震災以降に洋装が普及したこともあり，実用的な制作物を効率よく縫製するために家庭でのミシン裁縫が必要とされた時期であったことが教材に現れている。

教材内容は，ミシンの活用方法を具体的に提示するものであり，ミシンは自活の手段とすることを目的とした裁縫機械から，家庭における手縫いに代わる裁縫手段に移行した。また，女教師を目指す生徒はそれらの需要に応えられる知識や技術を得て，卒業後に指導者となった。

洋裁の指導教程の特徴としては，ミシン初心者に適した教材が含まれる普通科において，明治，昭和期共にシャツを製作していることが挙げられる。シャツが教材に採用された理由として，シャツは着用頻度が高く，家庭で縫うことができれば経済的であったことが考えられる。また，その裁縫工程においてミシンの附属品であったアタッチメントを使用することができ[33]，１着縫うことによって洋裁の基本的な技術を一通り習得できる教材であったことが推測される。

５．裁縫女学院の正規課程外でのミシン裁縫指導

５－１．夏期講習会

夏期講習会は，通年の授業とは別に，夏の短期間に集中的に行われた。『婦女新聞』（明治39.7.16）には，1906（明治39）年８月１日から27日間開講された第一回夏期講習会の募集要項が掲載されている（表５）。講習料は２円50銭で，同時期の裁縫女学院の高等科の月謝よりも１円高額である上，材料用布代として４円88銭９厘が必要であった。授業は各組60名の２組で行い，ここでも男子シャツの裁縫を初期に学ぶ教程が組まれている。

製作した教材は，『みしん裁縫ひとりまなび』[34] の製作物とほぼ共通している。夏期講習の材料用布の量を見ると，同書中に記載された用布とほぼ等しい量となっており，実物サイズでの指導が行われていたことがわかる。当時１/２サイズの雛形を用いた指導法もあった中，実物サイズでの指導は特徴的で，着用を前提とした指導であったことが推測できる。

５－２．シンガーミシン会社による授業料の免除と「無料出張教授」

明治40年３月，裁縫女学院は，シンガーミシンの購入者が１回50銭の授業料を支払い，自宅でミシン操作指導を学ぶ場として，院外授業の生徒を募集した。しかし，翌月，シンガーミシン会社は，教師をミシンの購入者宅に無料で派遣して指導する「無料出張教授」を開始し，院外授業は廃止された。「無料出張教授」と並行して，シンガーミシン会社は，ミシンの購入者が裁縫女学院に入学する際には，束脩[35] 及び月謝は同社が負担するとし，これらの購入者への優遇は，以後継続していく。

『婦女新聞』（明治40.12.2）から「無料出張教授」の内容が把握できる（表６）。第１回～11回までの教程が組まれており，ミシンの技術指導に限らず，種々の和洋服の作り方にまで及んだ。指導は，裁縫女学院の卒業生があたったことから，裁縫女学院の指導内容を踏襲するものであったと考えられる。出張回数は，月賦金振り込み回数に１を加えた数である。当時のミシンが48円から143円で販売されており，頭金が３円，月賦額が５円であったことから，出張回数は10～29回であったことが予想される。11回以降は裁ち方と製図種々となっており，ミシンの購入金額に応じて，より多くの裁ち方，製図を学ぶことができた。

このように，シンガーミシン会社が購入者への特典としたミシン裁縫指導は，販路拡張に合わせて各地に広がり，結果として裁縫女学院で用いられた教材による指導が全国で行われ，ミシン所有者が縫製し，着用していたことが示唆される。

表５　第一回夏期講習の指導内容と教材

講習作目（実物教授）	日数	材料用布	見積価格
ミシン使用法 附属品使用法 穴カガリ、マツリ縫	二日	天竺木綿大巾　三尺	金十八銭
普通シャツ裁方及縫方 （以下之に準ず）	二日	白チヂミ大巾（二尺）五尺五寸	金四十四銭
飾衿シャツ （部分縫）	一日	白チヂミ半巾　一尺三寸	金五銭二厘
運動シャツ 肩明シャツ （部分縫方説明）	三日	白キャリコ大巾（二尺四寸巾）二尺四寸 毛ベリ　一丈五尺	金二十四銭 金五銭
腰廻付ヅボン下 袴上股引仕立ヅボン下	三日	白チヂミ大巾　五尺五寸	金四十四銭 金四十三銭二厘
ホワイトシャーツ ニグリジーシャーツ （部分縫方説明）	四日	白キャリコ大巾　六尺四寸五分	金六十四銭五厘
カラー、カフス 子ックタイ　原文ママ	形ヲ纏フ一日	白キャリコ大巾　二尺 サラサ大巾　三尺五寸	金二十銭 金三十五銭
小児掛掛各種 小児前掛二種	形ヲ纏フ二日	白キャリコ大巾　二尺五寸ヅツ	金五十銭
女児簡単服二種 （下着説明）	二日	白メレンス大巾　三尺五寸 サラサ大巾　一尺 レース　二ヤード	金六十三銭 金十銭 金十銭
男児シャートウエース帽子及水兵服ノ製図裁縫	七日	白チヂミ大巾　六尺 毛ベリ　一丈五尺	金四十八銭 金五銭
	合計二十七日		合計金四円八十八銭九厘

表６　無料出張教授の指導内容と教材

第一回	ミシン使用法	
第二回	ミシン附属品使用法	
第三回	解き方及び縫い方一切	
第四回	小児前掛類、帽子類種々	裁方
第五回	襦袢、単衣	縫方
第六回	小児簡単服、シャツ類一切	裁方
第七回	袷、丸帯、博多帯、前垂	縫方
第八回	ズボン下、ネクタイ、カラー、カフス	裁方
第九回	ホワイトシャツ、ソフトシャーツ、仕事着一切	
第十回	水兵服、学校制服、立襟及び外套	
第十一回	以後裁ち方、製図種々	

６．『婦人画報』の広告に見るシンガーミシンに対する意識

最後に，裁縫女学院の生徒及びミシンを購入した女性が，ミシンに対してどのような意識を持っていたのか，シンガーミシン会社による販売広告から考察する。『婦人画報』には，1910（明治43）年12月から1913（大正２）年５月の間，ミシンの販売広告が23件掲載された[36]。広告に含まれるミシンの魅力を語る文言や挿絵の内容から，シンガーミシン会社がどんな謳い文句によって需要を喚起し，『婦人画報』読者がミシンの購入に至ったのかが見て取れる。広告に記載された内容は，概ね「和服も洋服も短時間で美しく仕上げる事の出来るシンガーミシンを月々僅かな負担で購入でき，さらに当社専門の女教師による無料教授を受けられる」という

ものであった。用いられた文言は５種類に分類することができ，その登場回数を表７に示す。

① 「無料教授・試用に関する」文言53件：無料教授に関する文言の掲載数は最も多い。このことから，ミシンを実際に使いこなせるかどうかが，購入を懸念する理由であったことが想像できる。使用法の指導が求められ，販売促進のための文言として無料教授が多用されていたことから，その需要の高さが見受けられる。

② 「販売に関する」文言38件：月賦販売に関するものと，価格に関するものを分類した。シンガーミシンには月賦販売法が用いられていた。この販売法はシンガーミシン社が始めたものであり，当時の日本において画期的な販売法であった。この販売法によって，シンガーミシンは多くの人がまとまったお金を必要とせずに購入できるようになったのである。販売に関する文言は，２番目に多く掲載され，ミシンが手に届くものであることを強調した。

③ 「ミシンに関する」文言37件：ミシンへの興味をひかせ，需要を喚起するものを分類した。“世界一”や“最上等”といった文言で，ミシンがいかに素晴らしいものであるのかということを謳い，イメージの向上を図っている。“家庭内の飾り”“綺麗で為になるもの”という表現からは，インテリアとしての購入も視野にあったことが窺える。

④ 「ミシンの使い方に関する」文言35件：ミシンの使い道や，どのように縫うことができるのかを説明している文言である。未知の機械であったミシンで何ができるのかを具体的に説明し，和服裁縫や刺繍もできるとしていたが，手縫いに代わる機械であることを強調している。

⑤ 「節約に関する」文言26件：ミシンを所持することによって，家計に経済効果があることを強調した文言である。自分でミシン裁縫ができれば，安く，これまでの手縫いより遥かに早く綺麗に縫うことができ，時間と労力の節約にもなるとしている。

シンガーミシンの販売広告からは，縫う機械としての実用的な需要だけではなく，それ以上に，所持すること自体がステイタスシンボルになるようなイメージをかきたてる販売戦略があったことが示

表７　『婦人画報』に掲載されたミシン販売広告の文言

【無料教授・試用に関する】53件	**【ミシンに関する】37件**
自宅で無料試用(20)	一生涯使用できる(6)
自宅で無料教授(20)	最上等・極上等(5)
熟練した女教師(9)	ミシンがあるのは楽しい家庭(4)
運賃無料(2)	世界最上等のミシン(3)
弊社の養成所を卒業(2)	絶対必要・必需品(3)
	新式なる裁縫機械(3)
【販売に関する】38件	最良の(2)
月〇圓、日に〇圓(8)	旧式なる面倒くさきやりかたを続けるか(2)
二八種手廻形(8)	世界で最も好い衣服を着る人が使用(2)
手付金不要(6)	世界最大の工場との取引(1)
月賦(3)	世界第一(1)
大売出し・大安売り(3)	世界の批評外に超絶(1)
割引・減価(3)	家庭内の飾り(1)
未曾有の需要・買い手が幾千人(3)	理想的お贈り物(1)
彩色した美麗な目録進呈(2)	綺麗で為になるもの(1)
最格安(1)	旧式と新式(1)
手軽く買える法(1)	
【節約に関する】26件	**【ミシンの使い道に関する】 35件**
倹約・節約・経済(11)	すべての家庭の裁縫(13)
時と労力と財の倹約になる(6)	綺麗にできる(6)
安く善くできる(5)	和服でも洋服でも(4)
貯蓄の増加(2)	如何なる日本服・着物(4)
どなたの財政でも(2)	手縫いよりも早く(4)
	手縫いよりもきれいに(3)
	優美で緻密な刺繍(1)

唆された。裁縫女学院の生徒の中には，ミシンの所持によって，経済的にも精神的にもより良い家庭生活を求めた女性が含まれていたことが想像できる。

７．おわりに

裁縫女学院は，1906（明治39）年に設立された“シンガーミシン裁縫女学院”から“シンガーミシン裁縫刺繍院”を経て“シンガー裁縫院”へ変遷しながら，ミシン裁縫の指導をおこなってきた。裁縫女学院が設立された当時に洋裁教育を行っていた学校は，渡辺辰五郎の東京裁縫女学校や共立女子職業女学校が代表的なものであるが，ミシン裁縫に特化した指導ではなかった。したがって，裁縫女学院によるミシン裁縫の専門的な指導は，他の裁縫学校と一線を画したものであったと言える。新聞及び雑誌に掲載された記事及び広告からは，裁縫女学院の沿革と指導内容が浮かび上がった。

“シンガーミシン裁縫女学院”は，校長の秦利舞子が，ミシン裁縫とミシン刺繍を軸に家政・技芸的な要素を含む内容の指導を行う，総合的な女子教育の場であった。科目の新設や，増え続けた入学希望者を受け入れるために校舎や寄宿舎の増築工事を行うなど，より充実した学習環境を整えていた。1916（大正５）年以降は“シンガー裁縫院”と名称を変え，宗田覚を主事におく。ミシンの販売促進活動の一環として購入者宅に派遣した「弊社の養成所を卒業した熟練した女教師」の教育機関として，ミシン裁縫やミシン刺繍に特化した指導に移行した。

裁縫女学院の教程は，ミシンの使用法に加えて，洋服を中心とした教材の縫製を裁断工程から指導するもので，初歩の教材には男子シャツが用いられた。教材は時代のニーズに適応しながら改編されており，明治期と昭和期の教材を比較すると，明治期には，ミシンが自活の手段ととらえた裁縫機械から，昭和期には家庭内における手縫いに代わる裁縫手段へと変化したことが窺え，裁縫女学院によるミシン裁縫教育にも洋装化進展の過程が見受けられる。

裁縫女学院では1921（大正10）年から１年間，並木伊三郎が遠藤正次郎と共に洋服科を設け，洋裁指導を行っていた。遠藤正次郎は，シンガーミシン社で販売促進にかかわった人物であり，文化服装学院の創立者である両者が，共に裁縫女学院の指導に携わった経緯からは，裁縫女学院と文化服装学院との関連性も示唆されて興味深い。

裁縫女学院におけるミシン裁縫教育は，当初，シンガーミシン社の販売促進の一環であったが，ミシンの購買意欲をかき立てる販売文句と共にミシンの販売網をもって全国に広がった。指導内容が全国のシンガーミシン購入者に伝習されたと仮定するならば，裁縫女学院が日本のミシンを使った洋裁教育の源流にあるといえる。

今回裁縫女学院の沿革を調査するにあたって用いた広告は，メディアの特性上，誇大な表現であったり，情報の一部のみを抜粋したりしていることも考えられる。今後は，主に公文書に

よる周辺資料との関連付けにより，初期のミシン裁縫教育に関する調査をさらに継続することが要請されよう。

註

1　東京都公文書館，第２種，第15類，第１巻，綴込番号22，明治39年10月18日

2　学費の納入に困窮した生徒のために，裁縫女学院では実業部が設けられ，ミシン裁縫の仕事を提供した。生徒は通学しながら収入を得ることができた。（秦利舞子「女子の新職業」「シンガーミシン裁縫」『婦人くらぶ』１（３），1908，pp. 81-86）

3　『国民新聞』明治39年10月22日

4　山本裕香，佐伯智子，横川公子「シンガーミシン洋裁講習会の衣服雛形について ── 山口津留氏製作の寄贈雛形 ──」武庫川女子大紀要（人文・社会科学），44，121-128，1996

5　遺品を遺した人物は，麹町区から華族女学校まで馬車で通うほど裕福な家庭の女性であった。遺品は，衣服雛形65点，被り物雛形21点，実物大衣服型紙56種，その他袋物標本等計約170点。

6　横川公子「明治期における一女性の技芸修業 ── 故山口ツル氏の遺品，袋物標本とその型紙を通して ──」武庫川女子大紀要（人文・社会科学），57，135-146，2009

7　池田仁美，横川公子「初期のシンガーミシン裁縫女学院における洋服型紙」生活環境学研究 No. 1，pp. 22-29，2013.9.1

8　渡辺慎治編『天才乎人才乎：現代実業家月旦』，東京堂，1908

9　『主婦之友』の創刊は大正６年で，裁縫女学院の後半期であることから，同院の沿革を把握する資料としては不十分であった。設立期に刊行されていた『婦女界』『婦人世界』の全容は調査中である。

10　孫峰茗『「婦女新聞」に見る明治日本の家政学』ことばと文化，v. 9，2008，p. 127-145

11　昭和３年以降の記事は，シンガーミシン争議の内容であるため，今回の調査対象からは除く。

12　不二出版編集部編『「婦女新聞」記事・執筆者索引』，不二出版株式会社，1985　同書の記事索引で，ミシンの関連記事が確認できるのは明治37年からである。

13　福島四郎編『婦女新聞第五巻』～『婦女新聞第三二巻』，不二出版株式会社，1988　調査対象とする期間は昭和３年のシンガー争議以前までとした。

14　臨川書店『DVD-ROM 版「婦人画報」』，臨川書店，（2004）

15　松村中将，中村少将，土方少佐等，名誉ある軍人の婦人が生徒として通った。（田村三次『活動せる実業界の婦人』博文館，1908）

16　軍人の使用するシャツやズボン下等の需要が増加し，効率的に縫製する必要があったこともシンガーミシンが世に知られるきっかけとなった。

17　住所地は，『婦女新聞』明治38年８月14日では“麹町区有楽町”，『婦女新聞』明治39年６月４日では“麹町区有楽町三丁目一番地”と記載されている。

18　「ミシン夏期講習」『朝日新聞』明治39年７月29日

19　『読売新聞』明治40年３月21日

20　『婦女新聞』明治40年９月２日

21　教員は，高木たね子，矢野はじめ子，他15名が務めた（『婦人画報』明治41年10月15日）。矢野はじめ子は『みしん裁縫ひとりまなび』の緒言で「本書を著はすに当りてシンガー裁縫刺繍院首席教師矢野元子氏の多大なる助力を感謝す」と記載された人物である。

22　「弊院は機械裁縫の模範学校たらん希望を以て六年以前設立せられ候処時勢の進運と共に今や全国の高等女学校裁縫女学校等に於ける機械裁縫教育の設備大に整頓して年々進歩の傾向著しくシンガー会社は今後女教師数百名を養生して全国に散在せしめんとの計画さえ有之候故■会は最早弊院存立の必要を認めざるに至り候仍て弊院は今月以降全て入学希望者を謝絶し現在生の卒業若くは修業期を予想し本年十二月末を以て閉院の事に決定致候間此予告仕候也　明治四十三年九月」

23　「三十七年七月秦敏之氏の設立せし麹町有楽町一ノ五同院は入学者も多く一時五百余名の在校生を有する程の隆盛に赴きしが其の後漸次減少して現今は二百余名に過ぎず秦氏は之を以て機械裁縫教育の普及したるによるものとし設立の目的既に達したれば存続の必要なしとて現在生の卒業期を予想し本年十二月限り閉院する旨発表せり。而して同院校舎は明年よりシンガー会社女教師養成の場所に充て，会社は其の卒業生の出づるを待って全国各都市にシンガーミシン裁縫女学校を設立する計画の由なるが秦氏は既に機械裁縫教育普及せりと見なし会社は其後を享けて更に全国に同目的の学校を起こさんとし此の矛盾せる意味が同一の秦氏の公開書中に見ゆるは異様に感ぜらる。」

24　「女手一つに商店と学校を経営して」『読売新聞』，1924年９月28日

25　矢野元子「ミシンの稽古をするには」『新真婦人』，不二出版，1915（４），26-27「……シンガー裁縫の女学院を設立されました。それは明治三十七年七月で御座いました。今はシンガー裁縫刺繍院と改稱しております。」

26　『婦女新聞』1924年９月７日と『読売新聞』1924年９月28日に設立に関する記事がある。

27　宗田覚『裁縫ミシン使用法全書：附・誰でも出来る小児洋服の裁方と縫方』，宗田出版部，1921

28　大沼淳『文化服装学院四十年のあゆみ』文科服装学院，1963

29　前掲27　附録に記載された“改良小児服のいろいろ”は，並木伊三郎が著している。

30　『読売新聞』大正14年10月16日

31　東京都公文書館，私立学校冊の92，昭和８年６月27日

32　『読売』明治39年10月22日

33　シャツの脇あきに三巻き具，ボタンホールに穴かがり具が用いられた。

34　秦利舞子『みしん裁縫ひとりまなび』，シンガーミシン裁縫女学院事業部，1909

35　束脩は，入学料に相当するもので，明治40年３月は１円である。

36　ミシンの販売広告は明治43年12月49号に初めて登場し，大正２年５月82号までの３年間に，49～50号，53～55号，57～69号，75～76号，79～82号に連続的に掲載されたが，それ以降は22年間掲載されず，昭和10年１月360号に１度掲載されたのを最後になくなった。67～69号と80，81号は同じ広告が使用されていたが，それ以外は掲載号によって異なる。